

Trial & Error トリアル・アンド・エラー No.82

試 行 錯 誤



昨年植えたユーカリの苗

特集 エチオピアのいまを語る

苦闘するエチオピアの近況	2
マーシャ村夜話 エチオピアよいとこ、つらいとこ	8
＜インタビュー＞ 大橋正明さん （24時間テレビチャリティー委員会）	12
日本縦断チャリティーウォークを終えて	14
ラオスの近くて遠い村	16
カンブチアの忘れ得ぬ人々	18
【書評】『NGOが見たカンブチア』	19

苦闘するエチオピアの近況

JVC執行委員 秋山 忠正

はじめに

昨年11月 ロンドンで行われた「エチオピアに飢餓再来」と題する講演会で、エチオピアのRRC（救援復興委員会）の国際部長テメラット・ケベデ氏（JVC業務の担当部長）が聴衆から鋭い質問の攻撃を受けている。

「一方ではエリトリア攻撃用大砲をソ連から購入しながら、他方では我々に食糧援助を頼みに来る。もっとやるべき大事があるのではないか」

「農民に支給する穀に比べ、どのくらい銃弾に金を使っているのか」

「備えのなかった73年に餓死者が20万人ですんだのに、十分備えたはずの84～85年になぜ100万以上も死んだのか」

これらのやりとりは西側市民のメンギスツ政権に対する不信といらだちを表わしている。74年の革命以来の経緯で、現政権に対し冷酷無残な共産主義独裁、正体不明の軍人集団という印象を持つ西側関係者も少なくない。この際同政権の14年間の歩みを検討し、同時に現在この国に開発プロジェクトを持つ我々の協力の意味を考えてみたい。

昨年9月新憲法が公布され、エチオピアは秘密に包まれた軍事政権から開かれた民主共和国に形式的には移行したわけである。一院制の国会（シエンゴ）が成立し、メンギスツは任期5年の大統領に就任。国家元首、3軍の最高司令官、「全閣僚、裁判官、上級官僚の任命権者」となり、同時にエチオピア労働者党の党首として総ての権力を一手に掌握した。憲法自体はソビエトスタイルのデモクラシーと評されているが、実権は労働者党、特に11人の政治局員にあるといわれる。

次に別表の指標に若干のコメントを加える。「生産」については、革命後金融機関、企業の国有化、都市の土地家屋ならびに農地を国有化し、1家族10

ヘクタール以内の耕作権のみを認める、等々劇的な改革を実行した。その14年間、デルグ（臨時軍事委員会）ならびに労働者党の実質的指導の下に、政府機関、農民組合（PA）、都市住民委員会（カバレ）によってこの国は運営されてきた。その間国の内外の敵との流血の死闘あり、デルグ内でも血を血で洗う権力闘争があり、まことに多難な歳月であった。しかも2回にわたる大干ばつと戦いながらの実績としては、むしろ評価すべきかもしれない。

「財政」については、ソ連陣営のエチオピアには緊急援助はしても長期開発援助はしないという西側の姿勢がこのODAの額に端的に現われている。これがこの国の復興を大幅に遅らせたことは否定できない。

「教育」「保健衛生」部門での数字はいずれも痛ましい。干ばつ・戦乱のしわ寄せがここに集中した感じである。

さてエチオピアの現況の理解のためには、次のような視点が有効である。その1は、ひんぱんにこの国を襲う干ばつ・飢餓対策のため作られた「早期警報システム」と予防体制の理解である。次に農業生産の現況分析とその生産性向上を目指した対策・特に農民の集団移住（リセットメント）の現況説明がその2である。最後に20年近くも死闘を続け、ぼう大な戦費と人命を喪失してきた、宿命的なエリトリア解放戦線（EPLF）、チグレ解放戦線（TPLF）との対決に言及することである。以上について略述する中で、現政権の功罪を明らかにしたいと思う。

なお新大統領メンギスツに関しては、「デルグ」（臨時軍事委員会）内の血ぬられた権力闘争に奇蹟的に生き残った不死身のマルキスト、という印象しか西側にはなかった。その常識を覆えたのが、84年の緊急救援に国連側リーダーとして活躍したクル

ト・ヤンセン氏である。その著書『エチオピアの飢餓』の中では、メンギスツとの友情のニュアンスすら感じさせる緊密な連係作戦の数々に言及している。「私のメンギスツへの印象は、知性・静かな威厳・

自制心と大いなる礼節の人ということである」と述べている。メンギスツは我々に全く知られていない面もあるらしい。

〔別表〕

＜ 財 政 ＞
(公的開発援助(受取)
正味実行済 ODA 額)

(世銀開発報告 1988)

	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1人当り (1986)
エチオピア*	百万ドル 140	191 "	212 "	245 "	200 "	339 "	364 "	715 "	642 "	14.8 ドル
ケニア	248 "	351 "	397 "	449 "	485 "	400 "	411 "	438 "	458 "	21.6 "
タンザニア	424 "	589 "	679 "	703 "	684 "	594 "	558 "	487 "	681 "	29.5 "
スーダン	318 "	687 "	583 "	632 "	740 "	962 "	622 "	1,128 "	940 "	41.7 "

* 82年頃迄の西側のODAの供給手控が復興計画にひびいている。

85～86の数字は飢餓のための緊急分が含まれている。

＜ 生 産 ＞

	GDP増加率		農産物生産増加率	
	1965～80	1980～86	1965～80	1980～86
エチオピア	2.7 %	0.8 %	1.2 %	-3.9 %
ケニア	6.4 "	3.4 "	4.9 "	2.8 "
タンザニア	3.7 "	0.9 "	1.6 "	0.8 "
スーダン	3.8 "	0.3 "	2.9 "	0.4 "

＜ 教 育 ＞

	小学校進学率		中学校進学率		成人識字率
	1965	1985	1965	1985	1980
エチオピア	11 %	36 %	2 %	12 %	15 %
ケニア	54 "	94 "	4 "	20 "	47 "
タンザニア	32 "	72 "	2 "	3 "	79 "
スーダン	29 "	49 "	4 "	19 "	32 "

＜ 保 健 衛 生 ＞

(世銀開発報告 1988)

	医師 1人当り人口		看護人 1人当り人口		摂取カロリー (1人当り)		平均寿命*3		1歳未満幼児** 死亡数(千人当り)	
	1965	1981	1965	1981	1965	1985	1965	1986	1965	1986
エチオピア	70,190 人	88,150人 ¹⁾	5,970 人	5,000 人	1,832 cal	1,704 cal ²⁾	42 歳	45 歳	165 人	155 人
ケニア	13,280 "	10,120 "	1,930 "	990 "	2,287 "	2,214 "	46 "	56 "	112 "	74 "
タンザニア	21,700 "	2,100 "	2,100 "	2,100 "	1,970 "	2,335 "	41 "	51 "	138 "	108 "
スーダン	23,500 "	9,800 "	3,360 "	1,440 "	1,874 "	2,168 "	39 "	47 "	160 "	108 "

*1 サハラ以南の国で最低(次はブルキナファンの55,760人に一人)

*2 これ以下はモザンビークの1,617 cal だけ。

*3 平均寿命の改善一番鈍い。ギニア、ニジェール、マラウイ、チャド等と最短命グループに属する。

*4 世界最高値。マラウイの154人がこれに次ぐ。

早期警報システムとEPPGの発足

その1 84～86年の飢餓との戦い

1984年10月23日、英国のBBC放送からエチオピア北部のメケル、コレムの難民センターの状況が放映され、世界中の家庭を驚愕の淵に投げこんだ。まさに死にひんしている難民、赤ん坊の弱々しい泣き声。何万人もの難民を収容しながら与えるべき薬も食糧も全くつき果てた恐るべき給食センターの光景は、広島・長崎の再現であった。「もし神がいますなら、今こそ奇蹟を与えたまえ」と叫ばずにはいらなかったという。

アフリカで20年以上も戦争、処刑、死を撮影し続けてきたこのベテランカメラマンも、今回だけは慟哭しながらフィルムを編集したと述懐している。西側市民の中からは「これは今世紀最大のスキャンダ

ルだ」との叫び声があがった。またアメリカでは、エチオピアという国名すら知らないレベルの市民が、泣きながら^{きよ}金にかけつけたという。こうした市民運動は自国政府を揺さぶる運動に広がり、10億ドルをこす救援資金がエチオピアに送られた。国連も11月早々事務総長の特命を受けたクルト・ヤンセン氏を、エチオピア緊急救援作戦(EOE)の長として派遣し、関係国際機関を統合して作戦が開始された。

こうして、平和時の1プロジェクトとしては今世紀最大といわれる国際社会の動員作戦が、86年初頭まで続けられた。結局立ち上がりの遅れのため100万人をこす死者が出たが、それでもなお数百万人の生命が救われたといわれる。

その2 早期警報システムの存在

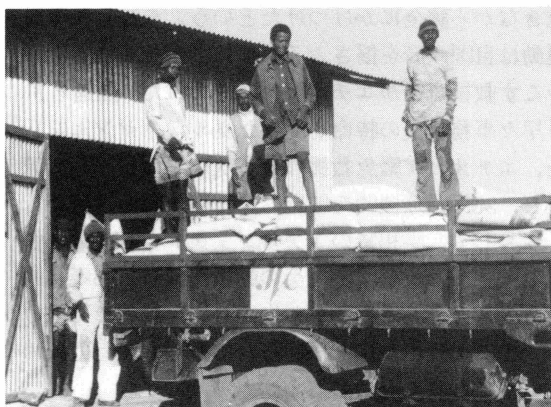
それではこのBBC放送までどうして手が打たれなかったのか。必要な情報がなかったのか。事実は全く逆である。いわゆる「早期警報システム」(EWS)はRRCの中に存在していた。そしてRRC, ユニセフ, FAO(食糧農業機構)から再三の警報と救援要請が国際社会に出ていたのである。

そもそも未然に飢餓の到来を予測し、その対策を構じようと早期警報システムが1976年にRRC内に作られていた。その判断の指標として、「降雨量」「穀物の作柄のモニタリング」「種まきと耕作の時期」「地方の穀物の貯蔵状況」「地方市場の穀物価格の上昇と家畜の値下りの動き」「住民の他地区への移動情報」等が使われている。

それではなぜ84年にはこのシステムが役立たなかったのか。まず当時はアフリカ全体が大干ばつの真只中にあり、国連に対し千数百万トンの食糧援助が要請されていたこと。国連調査団がエチオピアの必要援助量を過少報告するミスをしたこと。さらに「またまた飢餓の訴えか」と、国際社会が真剣に取上げてくれなかったことが重なって、最悪の事態に至ったのである。

しかし上述のEOEを中核に、50以上の各国民間ボランティア団体(NGO), RRCによる救援作戦は見事であった。特にOXFAM, CARE, セーブ・ザ・チルドレン, 国際赤十字等のNGOの活躍は目ざましかったという。またJVCのアジバールでの医療活動はまだ記憶に新しいところである。東西の対立を越えて、米、英、西独、東独、ポーランド、ソ連等によって行われた空輸共同作戦は、人道主義未だ地に落ちずとの印象を深くした。

その3 EPPGの発足



JVCによる小麦の配給

84年の救援作戦の残したもう1つの成果は、「早期警報システム」による救援活動の重要性が再認識されたことである。こうして87年1月、エチオピアに「緊急予防準備グループ」(EPPG)が設立された。UNDP(国連開発計画), ユニセフ, FAO, WFP(世界食糧計画)等国連関係機関すべてと世界銀行がそのメンバーで、隔週会合が持たれている。また別にRRC主催の「情報委員会」が作られ、EPPG, RRC, CRDAが参加して月例の会合を持っている。(CRDAとはエチオピア在住の50をこす民間ボランティア団体の統合体で、JVCもその一員である)これらの会合の目的は、開発と緊急救援に関する情報交換と相互支援にある。

その4 88年飢餓再来のおそれ

ところで87年エチオピア北部諸州はまたまた干ばつに襲われ、エリトリア, チグレ, ウォロ等の諸州がまたも飢餓の再来に脅かされることになった。前述の早期警報システムの予測から、84年以上の被害が88年後半に到来するというのが、関係者の一致した見解となった。そこで今日現在、上述のEPPG, RRC情報委員会の組織をフル活用し、各国NGO, RRC, 国連機関がそれぞれ守備範囲を定めて防衛体制をとっている。そのため必要とされる130万トン程度の援助食糧も手配済みである。今回はむしろ国内の輸送手段—トラックや空輸用輸送機の手配, 貯蔵設備の増強等が諸外国への要請の重点になっている。

その5 JVCの活躍

JVCもウォロ州マーシャ村を中心に、ワレヒメノ郡の6万5000人に4000トンの食糧救援の体制を整えた。食糧の調達, 局地輸送用トラックの手配も終っている。この計画を支援して下さった日本の関係者の方々に改めて謝意を表したい。JVCのこの作戦のねらいの1つは、84年に大きな被害を出したコレブ地区(マーシャ村の西60キロ)の住民の救済がある。この地区にJVCはすでに十数回調査に赴いており、筆者も昨年11月には同地区で、農民組合の代表者たちから直接援助の要請を受けている。今回の活動は直接被災者の顔の見える活動であり、日本のNGOとしても画期的な挑戦といえよう。昨年8月からフード・フォー・ワークの形で支援を続けているが、受持地区からは1人の餓死者も出すまいという我々の願いは達成されそうである。

集団移住計画(リセットルメント)

その1 エチオピア農業の近況

この国の農業はGDPの48%、労働人口の80%を占めるが、86年度1人当たりの生産性は80年基準で87%と低調である。国民全体の年間穀物所要量は655万トンで、生産は平均並で620万トン、平素から自給は不可能である。(政府は一応94年を自給体制の目標年にしているが)

生産者の構造は、96%をいわゆる個人生産者(Peasant farmer)に依存しており、政府が財政ならびに技術的支援をしている国営農場、協同組合農場の貢献度はわずかに4%にすぎない。

世界銀行、「農業開発国際基金」、スウェーデン等が、「ミニマム・パッケージ・プログラム」と称して、個人農業に改良種子、肥料、農薬等の投下物、耕作器具、改良普及サービス等の援助を続けてきた。しかし原則3年毎の耕地のローテーション、政府の低い買上価格水準(たとえば輸入価格に比べメイズはその56%、ソルガム67%、小麦は69%)等が足を引張り、また耕地の95%を占める北部地区の荒廃、農業技術水準の遅れが複合して停滞が続いている。そこで政府としては、肥沃な西南部の耕地に活路を求め、そこに国家コントロール下の集団農場、協同組合農場の建設を意図している。

西側ドナーからの政府に対する再三の要請に応え、買上価格の改訂の動きも見えてきた。最近企画大臣が、「40%を政府に供出し、残りはオープンマーケットに出すことを認める」という発言をしており、軌道修正の動きも見え始めたようである。

その2 集団移住

メンギスツ政権に対する批判のうち賛否の一番やかましいものは、この集団移住計画であろう。1983~84年にはFAOと農業省が「エチオピア高地再開発研究」の中でその必要性をうたっており、移住そのものは、1976年2月にはすでに始っていた。それが近年なぜこうした激しい論争を呼んでいるのだろうか。

その前提として荒廃した北部高地の現況に触れる。北部高地はエチオピア全土の5分の1を占めるが、そこに全人口の88%が集中している。7000万の家畜の3分の2、耕作地の95%が北部にある。しかも、高地の大部分20万平方キロはひどく侵食され、穀物を保持できない。また耕地から毎年ヘクタール当

南部の移住地、ガンベラ。



り100トンの土壌が流出している。国土をおおう森林は1900年に40%、50年に14%、現在は4%となっている。(北部高地はほとんど0に近い)

政府もWFPの支援のもとに土壤保全・植林に真剣な努力を続けてきた。85年までに70万ヘクタールが植林され、その後毎年2万ヘクタールの植林が続けている。またテラッシングも20万キロに達している。しかし毎年差し引き20万ヘクタールの森林が失われ、土壌流失は続いている。

こうした現況から、政府は84年の飢餓の真只中もソ連の支援の下、南西部への集団移住を強行した。すでに60万人は完了し、さらに150万人の移住を計画しているという。

これに対し当初西側諸国は、住民の意志を無視した強圧的行為であり、北部の過疎化をねらったゲリラ対策として強く非難した。「国境なき医師団」や「サバイバル・インターナショナル」のような人権保護団体も同調した。高度3000メートルのむしろ秋冷の地から、500~600メートルのアフリカ有数の高温多湿地帯への急速な移動がもたらす心理的・肉体的負担は想像に難くない。しかしその後も他に代案がないため、止むを得ぬ措置としてこれを容認する意見が、イタリア等のEEC諸国、1部NGO間に広がっている。(個人的感想として、私が1昨年ガンベラ周辺の移住地を訪ねた時の印象は、大変悲観的であったことを付言する)。したがって現在の論点は移住地の選択とそのアフターケア、さらに移住に際して、どれだけ本人の自発性が認められるかにかかっている。

国連の統計では、集団移住の定着には1家族当たり年間5000ドル、5年の歳月を要するといわれる。成功例の1つとされるウオレガ州のアソサの移住地は3500~4600ドルが5年以上投入されたといわれる。このぼう大な資金をどうして調達できるか。エ

チオピア政府の執念にもかかわらず前途は厳しい。

住民の移住の意志の自発性確認と尊重の問題はさらに難しい。飢餓の真最中には地獄からの脱出を願っても、1度雨が戻れば墳墓の地にすがりつくのが人情である。それぞれの地区では党、RRC、農民組合代表者で構成される「スクリーニング委員会」

エリトリアの現況

昨年10月末エリトリアに向かった国連の救援輸送車が、エリトリア解放戦線(EPLF)に襲われて炎上したニュースは関係者を驚かせたが、その後エリトリア、チグレ両州でのゲリラの政府軍撃破のニュースが続々伝わってきた。

3月19日には北部のアファベットで政府軍は2万の死傷者を出し、50台のタンクが捕獲され、ソ連の3人の高級将校も捕虜となった。政府軍の士気は弛緩し、厭戦気運がみなぎっており、准将を含む3人の指揮官が処刑されたという。

また4月には両州で救援活動中の民間ボランティア——国際赤十字等に退去命令が出され、昨年秋から展開してきた飢餓防衛に大きな穴があいた。最近政府軍がやや盛り返したといわれるが、両州住民の内350万は絶対食糧援助が必要で、今日現在まで救援活動について全く情報がなく、深く憂慮している。

さて1889年イタリアに占領されてから60年を経たエリトリア人には、エチオピア人としてのアイデンティティは全くないという。1950年国連の裁定の下、エチオピアと連邦を形成して10年を経たが、エチオピアは1962年一方的にエリトリアを併合し、革命後もその方針を継続して今日に至った。

アムハラ語は公用語となり、小学校で強制的に教えられた。産業設備の主なものエチオピアに運び去られ、住民は常に脅迫にさらされた。こうして民族的自主独立を求めて26年にもわたる軍事的抵抗が始まった。EPLFの現勢力は2～3万で、住民の85%の支持を受けている。

この長期の戦闘のため、両軍はぼう大な死者、負傷者を出し、国土は荒廃するままとなった。エチオピアでは年間5億ドル、政府予算の50%を戦費に浪費し、国民は徴兵におびえ、産業は停滞し、飢餓頻発の決定的要因となっている。

EPLFの軍勢力は強力ですでに正規軍レベルにあるといわれ、力でEPLFを屈服することはもはや不可能で、今こそ平和的解決が必要といわれている。EPLFはこの26年間苦難に堪えて、数々の改革を実

が移住者の審査に当たっているといわれるが、実際にはうまく運用されていないという。国としてのマクロレベルでの施策の遂行と、ミクロの個人の決断のギャップを越えるのは本当に容易なことではない。

なお村落集中化計画が同時に進められており、論議と課題を抱えていることを付言する。

行している。特に土地の再配分、婦人の解放と地位の向上、空爆をかいくぐっての植林、井戸掘り、テラス作り、医療設備の拡充、輸送の拡大等人民の基本的生活ニーズの整備に努めてきた。また電気、電子、機械、工作部門などいわゆる「適性技術」を駆使しての自主開発は途上国の自主開発努力の模範である。

かつて伊藤正孝氏によって「きわめてストイックなマルクスレーニン主義を奉ずる新しい人間集団(ホモノバ)」といわれた彼らも最近、西側諸国に対し混合経済を呼びかけて協力を求めるほど成熟しつつある。

また彼らは国民投票で「完全独立、エチオピアとの連邦形成、エチオピア国内での自主権の確立」の3案を住民に選択させる解決策を早くから提示しているが、政府側はEPLFを山賊、犯罪人と称して同じテーブルにつくことを拒否している。ソ連すらこれ以上の軍事援助を渋っているという今日、メンギスツ政権はまさに正念場に立っているといえよう。

おわりに

エチオピア政権に対する批判には、共産主義軍党政権に対する潜在的反発と、70年代のデルグの血の粛正に対する恐怖と嫌悪があり、簡単に消えるものではない。しかし、そのために多くの先入観にとらわれた情報の流れたことも事実である。エチオピア側の不手際も数多くあるが、西側も事態を客観的に観察し、前向きに現実的に対処する必要がある。依然対エリトリア強硬策に固執する等々、エチオピア政府首脳の方針には賛同しがたいものが多く残るが、RRCや財務官僚等の活動に対しては、その知性と献身と誠実さに対し敬意を表したい。

しかし我々の究極の関心はこの国の人民達の運命にある。現在苦難の真只中にある彼らにも、その誠実な勤勉努力が必ず報われる夜明けの来ることを確信する。そこに我々の協力に挺身する意義もあると思う。

かんばつ

旱魃と内戦の国にありて

山田 盛

雨がようやく戻ってきた。七月に入り、連日降り続けている雨は、干からびた大地に潤いを与え、その生命力を蘇らせている。アラーへの祈りが届いたのか、キリストがその慈悲心を雨に変えたのか、はたまた単なる自然の気紛れか、いずれにしろ待望の雨である。農作業の再開は収穫を約束し、農民に誇りの回復をもたらしている。この状態が続けば、開始後一年になろうとしている緊急食糧配給に、今年いっぱいでは終止符を打つことができるかもしれない。しかし、問題はもっと複雑であり、束の間の安堵感を押し潰してしまうほど重たい。

非社会的であらんと志した一介の旅行者が、何の因果か飢餓の国に紛れ込み、かけらほど残った良心を叱咤激励し、“無知は悪徳”、“無為は犯罪”という^{かまびす}し声に鞭打たれつつ、人災と天災の生き地獄にささやかな抵抗を試み、気力、体力ともに消耗し切った夜更け、闇に向かって一人ばやいてみた。

内 戦

エリトリア、チグレ両州の解放戦線の動きが活発化、エチオピア政府は国家総動員令を發布、徴兵と特別税で対抗。一時はウォロ州の北部までゲリラが南下、治安状況の悪化を理由に NGO の活動が制限される。州都デシの病院は負傷兵の呻き声に満ち、一般患者の診療もままならぬ。補充兵を満載したトラックが土煙を上げて疾走する。旱魃が悲劇に拍車をかける。権力闘争に寝食を忘れる人間がいる限り、殺し合いはなくなるまいであろうが、それにしても、双方が食えない時ぐらい停戦を考えられないものか。それともこれは正義の名を冠した口減らし政策か。

飢 死

一切れのパンを分かち合う美談は、感傷的な悲願にすぎないことを思い知らされる。共有するに

は、圧倒的に絶対量が不足し、弱者へのいたわりが確実に自らの死を意味する時、非情な選択を迫られる。衰弱の激しい子供、老い先の短い老人が、最初の犠牲者となる。我勝ちに食いを奪い合う姿が醜悪なのではない。ここまで人間が追い込まれるまでに、何らかの人為的な不正義、不平等が働いたとすれば、それをもたらした人間の心の歪みこそ、最も醜いものであろう。

それにしても、飢餓線上にある人々の中にいて、美食、飽食への執念がなくなるどころか、一層強くなっていくのは何としたことか。疲れを知らない我が胃袋氏の鈍感さに脱帽。

宗 教

良きにつけ、悪しきにつけ、これほど人間を束縛し、また強くするものを知らない。何やら胡散臭い新興宗教も含め、世の中にはあまたの宗教、宗派があり、それぞれが厳しい戒律をもって人間の心に対峙する。一切が神の崇高な意志の下にあり、信じ、従うことによって救済、安寧の道がひらかれるという。信仰が心に平安をもたらし、死を泰然と迎えさせてくれるものであるならば、不遜な無神論者のとやかく言うべき筋合いではないが、終日祈りを捧げているだけで、常態化した飢餓に根本的な解決を得られるのであろうか。

雹^{ひょう}を伴った激しい雨がトタン屋根をたたいている。トタン板の継ぎ目から漏れる雨滴が原稿用紙を濡らす。雨期の到来と共に大量発生した虫が、ベッドの上で宴会を楽しんでいる。トラックのエンジンをかける音がかすかに聞こえる。食糧輸送の早朝便だ。補修の結果、かなり状態が良くなったとはいえ、まだ危険な悪路である。ぬかるみで立往生しなければいいのだが。

一刻の猶予が惨事につながりかねない緊急救援。タフな仕事である。

(マーシャ村にて)

エチオピアよいとこ、つらいとこ

伊藤達男 伊藤幸子 山田 盛 有本敦子

マーシャ村。若いスタッフからお父さんと呼ばれ始めた伊藤。めっきりしらが頭のその妻幸子。マーシャがやっぱりいいよなあと山田。便秘で苦しむ有本敦子。この4人が今マーシャ村で暮らし、活動している日本人だ。アジス事務所は鈴木ががんばっている。

山田 久しぶりでアジスの仕事から解放された。(鈴木さんが赴任するまでエチオピア代表を代行していた—編集部) やっぱりマーシャが落ちつきまんなあ。

幸子 エー本当? アジスの方が楽しいんじゃないの。

有本 夜遊びもできるしね。

山田 電気があると夜と昼のけじめがつけへんねん。

伊藤 日本なんかその典型だよな。

有本 あっという間に一日が過ぎちゃう。ここじゃ寝る時間がたっぷりある。

幸子 人間は8時になったら寝るべきなんだ。

有本 そうだ。そうだ。

伊藤・山田 ???

山田 ここは妙な誘惑がないから落ちつくんだよな。

ボランティア

山田 初めさあ、ボランティアっていうから、こっちの人と一緒に穴掘りでもして汗を流すのかと思っていた。食費ぐらい出してもらって。

有本 それで来てみたら?

山田 労務管理とか、報告書を作るとか、中小企業

の社長みたいやん。

幸子 どうしてそうなっちゃったんだ?

山田 ぼくの思い違いですねん。はっきりゆうて。

ランプ

唯一の発電機がもう何カ月も故障していて、夜のあかりは灯油のランプのみ。山田がランプをつけようとする。

有本 あっ山田さん、それそんなに燃やしちゃだめ。

山田 どうしてさ。

有本 燃えてすすで真っ黒になっちゃうからだめ。

山田 こっちから見ると色っぽいやん。(関係ないことを言ってる有本の気嫌をとる) ケロシン(灯油)が漏れちゃったんだよ。

有本がテキパキと漏れたケロシンをふきとり、圧力をカッカカッとかけ、あっけなくランプをつけてしまう。

山田 おお、プロやん。

食事

ウォルコハはみそ汁、テンプラ、親子丼、カツレツ、パン、ピザまで焼いてしまう料理の人。健康管理はたいせつ。だからおいしくごはんを食べよう。その一環で味噌作りも。

幸子 蒸したごはんにくうじ菌をふりかけて、二晩一緒に寝てやると、米こうじができちゃうんだからね。

伊藤 おれは冷え症でだめだ。

有本 私も冷たいからね。

幸子 じゃ、男の人はゆでた大豆をその洗面器の中でつぶしてよ。

有本 塩はコップ2杯ぐらいでいいかね。

幸子 うん、かびが生えてきそうだったら足してもいいし。

一年寝かせればおいしいのだろうけど、そんなに待ってもいられない。1カ月後から食べ始めて食べ終わる5カ月後ぐらいにいい味噌の香りがはじめるんだからいやになっちゃう。でも自家製なんだ。



伊藤達男

トイレットペーパー

幸子、トイレへ行くのにトイレットペーパーを切る。

伊藤 あれ、おまえ、そんなに使うの？ おれはねえ、これで1週間分だ。

幸子 エー、それで足りるの？

伊藤 いいか、ピッとくそを切るんだ。それで三つ折りにして一回。それ半分に折ってまたふくの。これで十分。

木がないと言って植林しているのに、無駄に紙を使っているバカ人間。JVCソマリアじゃ水を使っていると聞く。

フロ

水浴びをしたい人はシャワー室に水を運んで浴びる。どのエチオピア人スタッフも1週間に1度は浴びている。日本人は——

伊藤 どうせまた汚れるんだから垢を落としても意味がない。

と、強く主張。
アジスに出るまで

伊藤 幸子

1度も入らず。(フロは3回/年) わき毛もさびることを発見。

有本 ありゃあ、さびいなあ、あったかいお風呂に入りたい。

幸子 本当に入らなくても何の害もない。

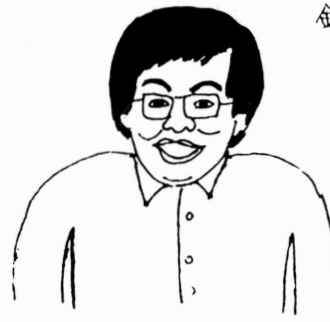
山田 たまにぼくはあびてますよ。

電気、水道、ガスなし。病気もせず。慣れてしまえば不便も感じず。不安もなし。

ここの人々の暮らしぶりに驚きもしなくなる頃、だんだんと村の様子、政府の様子などがわかってきて腹たつことが多くなる。貧しいことの原因がいくつも重なりあっている。貧乏くじを引くのはいつだって農民だ。

徴兵

エチオピア北部での内戦が激しくなっている。村から若者が3人、4人と引っぱられていく。JVCの



ワーカー、スタッフの中にもにらまれている人たちがいる。

山田 シュクール（エチオピア人スタッフ）はあれからお呼びがかかっている？

有本 もう大丈夫。でもバイエとアムデウはまだあぶない。各カバレからちょっと前に4人ずつ連れていかれた。

伊藤 今は戦場に行くんじゃないで、訓練で連れていかれるんだって。

山田 ああ、その訓練の時のためにJVCの食器やナベなんか出さなきゃならなかったのか。

幸子 それにしてもJVCで働いていると、にらまれちゃうんだ。

税金

昨年1年は収入税だけだったが、戦争が激しくなって特別税も払わなければならなくなった。

山田 スペシャルタックスは高けえなあ。イエットは2つの税で140ブルぐらい。

伊藤 給料が650ブルだから2割以上か。たまんねえなあ。

有本 農民からも取りあげてるって。

幸子 コレブでさ、食糧配給のための登録場で、税金取り上げたっていうからひどいねえ。

山田 税金払わなきゃ食糧ももらえないのか。

伊藤 政府が食糧配っているわけじゃないんだぞ。

弱者

食糧不足が深刻になるにつけ、ジイさん、バアさん、障害者がJVCに集まり始めた。働けない人約1300人に食糧配給をした。

伊藤 やっぱり働けない人といってもただ配りはだめだな。家族か親せきの人に代って働いてもらおう。

有本 誰も身よりのない人はほかの人を雇わなくちゃならないんだって。そうしたらもらえる小麦が少しになっちゃう。

幸子 働けない人は現場にいっしょにいただけでもいいんじゃない。

有本 みんな座ってるだけだったりして。みんな頭いいからなあ。

弱者だから正直と考えると裏切られる。貧しいゆえにうそをつき、自分だけ得をしようとする。貧しい人、弱い人の自立を考える時、あまりの道のりの遠さに沈みこんでしまう。

しっと深さ

JVCの敷地内で、本当に貧しいおじさん10人が野菜を作っている。収入源にするためだ。

エシャトウ 本当に彼らは貧しい。財産もない。小麦の収穫もない。

有本 JVCで1カ月訓練したあと、自分の家にもどって自分で生計をたてるべきなんじゃないの？

エシャトウ もし自分の家で始めたら、まわりの人がしっとして何されるかわからない。

幸子 りっぱな菜園を作っているおじさんがいたけどこれ以上大きくしないって言ってた。放火なんかされたら大変だって。

エシャトウ だから、グループになってここで共同で野菜を作って現金を得る方法がいい。

幸子 貧乏人同士、足ひっぱりあうんだから。

有本 まったくがっかりしちゃうね。

植林

雨が降り出して、山に木を植える作業が始まった。そのあと、また今年も苗木を農民に配る予定。

有本 去年はもうほんとうにでんてこまいだった。

おじさんが「おれにくれ」って何度も何度も来て。

伊藤 けんかするほど苗木がほしいなら自分で作れよなあ。

幸子 道ばたで苗木の泥を捨ててるおじさんにも怒ったなあ。

有本 ビニールつけたまま植えてた人もいたね。子供クラブの子供たちに注意されていた。

伊藤 大人はだめだなあ。

教育活動

有本 あのね、教育活動をしているお母ちゃんたち「くつくれ、くつくれ」って言うの。

伊藤 なんで？

有本 毎日毎日遠くまで歩いて家庭訪問に行くでしょ。大事なくつがこわれちゃうって。



山田 くつみたい足してるやん。

幸子 そりゃひどいなあ。でもどのくらい歩かね。

有本 昨日はね、片道1時間半歩いて栄養失調の子の家へ行って来た。3つ山越えて。

伊藤 しゃあないか。がんばってるもんな。

有本 JVCに予算あるかしら。

幸子 大丈夫。長ぐつ買おう。

病気

4人の門番のうち1人がライ病と診断された。

幸子 野生児イマル、ライ病なんだってね。

伊藤 まったくライ病って不幸な病気だよなあ。

有本 診療所で毎月、薬配ってるけどね、その家族のまで薬がないから子供にうつっちゃう。

山田 苗木のマネージャーもそうだね。

伊藤 7年前に症状が出てきたんだって。

有本 3人目の子は生まれたばかり。あと何年かすれば子供にも病気が出てくるだろうなあ。

伊藤 こんなものこそすぐになくなってほしいよな。

幸子 豊富にあるのは病気ばかりか。

財産といえるのは家畜だけ。家の中をのぞいても先進国が作り出した物はなにもない。土からできた物か、草から作った物。

雨が降らなかっただけで、もう死に直面するはめになる。どうしたらこの人たちの生活が強いしっかりしたものになるのだろう。

雨

今年は7月3日から雨が始まった。このまま8月9月と降ってくれると、年末12月には麦、豆の収穫が望める。トタンをたたく雨の音。

伊藤 お、いいぞ、いいぞ。本気で降る気だな。
有本 だけどさあ。日本みたいに定期的に降るんじゃないでしょう、ここの雨。通りがかりにドサッと降るかんじ。

伊藤 このまま降ればなあ。緊急救援も今年で終わりだな。もう1年続くとするとなあ、地獄だよ。

山田 そう。トラックがない。小麦がない。車がこわれた。今年の12月までだと思うと、先が見えるって感じ。

有本 配給の小麦はあるの？

伊藤 来年に入ってもまだ半分ぐらいはある。WFP（世界食糧計画）からのが。

幸子 この雨じゃ、ここまで小麦を運んでくるのも取りにくるのも大変だから、いっそ2カ月分ぐらい配っちゃったら？

伊藤 運ぶロバがないんだよ、農民には。

山田 ああ、ようけい雨降るやん。

畑に雨は必要だ。恵みの雨だ。しかし反面、この活動になくってはならない小麦をマーシャまで運びこむのが難しくなってくる。いくら道路を修理してもすぐ痛んでしまう。今日もトラックが泥にはまって立ち往生してしまった。そんな懸念を無視して政府の役人は無理難題をふっかけてくる。



緊急救援について役人と話しあう

ハイル 034, 035, 036 (カバレ・農民組合の番号) は今後 JVC が開発プログラムを広げていく地域だから緊急も JVC でカバーした方が良く。問題は食糧の確保とその輸送ができるかだ。

山田 食糧や輸送の面で RRC (難民救援委員会) の協力が得られるなら、JVC がこの3カバレもカバー

できる。しかし、今後雨期に入るので、道路が悪くなり、マーシャまで小麦が運べなくなるかもしれない。だからその時はアンバマリウム (倉庫がある) で配ることを了解してほしい。

ハイル それはだめだ。全部マーシャで配給しなければいけない。1日で取りに来れる所じゃなければいけない。

山田 一番遠くのコレブの人たちにはマーシャで配る。034, 35, 36 はまだアンバマリウムに近い。マーシャに運び込む輸送が大変なんだ。

ハイル ワールド・ビジョンもマーシャで配らなければいけない。何か困ったことがあれば言ってくれ。

話し合いのあとで

伊藤 やつらは気軽な気持で口先きだけなんだよなあ。できないことも。

山田 日本人は一回約束をしたら守ろうと努力する。簡単にできそうもないことを約束しないんだ。

伊藤 まあしゃあないよなあ。くそったれ。034~36 は開発プロジェクトの方がやりやすいんだがなあ。がんばるしかないなあ。

レポート

エチオピアは書類の国だ。

有本 日報や四半期毎、1年毎のレポートを出せさせていやになっちゃうね。

伊藤 農具をいくつ配ったとかさ。

幸子 政府の人から紙に書く仕事取ったら、なんにもなくなっちゃうでしょ。

山田 忙しいさなかに期限つきの報告書を準備するのは頭にくるな。

伊藤 意味のありそうな書類ならいいけどさあ。

エチオピアで活動している日本の NGO は24時間テレビとJVCだ。どちらも西欧の NGO と違い幹線道路からはずれた山の奥で活動している。農民の状況を日々目にしているから“かゆいところに手の届く”活動ができる。緊急救援もものすごく早い対応だった。しかしこの政府の評価ときたら、“いくらお金を使ったか”だ。どんなふうに農民の生活がよくなったかなんて興味ない。

この活動の成果が簡単に目に見えないだけ苦しいのだけど、こつこつ努力するしかない。一緒になっていくしかない。貧しさをなくす奇跡などないのだ。

(伊藤幸子 カットも)

農民の生活を犠牲にしてまで植林はできない

エチオピアではJVCのほかに、夏のキャンペーンでおなじみの24時間テレビチャリティー委員会が日本のNGOとして活動している。JVCのいるウォロ州でクリニックを開き、農村復興プロジェクトを行っているが、お互いの仕事に忙しくそれぞれの現場を訪れたことはなかった。この2月から4月にかけて24時間テレビの評価チームに加わった大橋正明さん(シャプラニール副代表、元JVC執行委員)に現地での感想を伺った。

24時間テレビの前線基地のクラマソ地区は、85年緊急時に食料配給をしていたシュリンカキャンプから4輪駆動で1時間、そこからラバで4時間ほど登った地点にあります。エチオピア人でさえ「こんな所に人が!」というような山岳地帯に3万人が住んでいます。思わず私は「平家の落人みたいな人たちじゃないの」と聞いてしまいました。

山肌へばりつくような畑に大麦とソラ豆を作っています。ここは寒すぎてテフはできません。もちろん彼らだってテフで作ったインジェラが1番おいしいことはわかっていますが、食べられないのです。社会主義体制になってから地主制はなくなり、子供が生まれたら新しい土地をもらえるようになりました。しかし、もはや人口過剰で分け与える土地はありません。なんでこんな土地にしがみつくなか不思議な気もしますが、彼らはマラリアなどの病気がある南への強制移住を恐れています。

クラマソ地区ではJVCと同じように86年からフード・フォー・ワークで植林をしています。これまで30万本ほど植えましたが、悩みは植える土地がないことです。めいっぱい畑を作っているので、これ

以上の植林をめざすと畑をつぶさなければなりません。「環境」か「今の生活」かと問われれば後者を優先しなければならないでしょう。いくら生態系が大事だからといって目の前の農民の生活を犠牲にすることはできませんからね。だからエチオピア政府に約束した数の苗木を植えられなくて困っています。

もう1つのフード・フォー・ワークは道路建設です。幅6メートルの道ができれば急病人や食料の運搬が容易になるでしょう。一方、これによって政府の支配が強まったり、商品経済が一気に流れ込む恐れもあります。しかし私としては、閉鎖経済をそんなに持ち上げることはしたくありません。パズールを見てもその波は確実に来ています。むしろ商品作物だって何だって売れて実収入がもう少し上って、農業や農地に愛着がわくようになることは必要じゃないか。今は復興中だからしかたないと思いますが、本当はものを与えることに賛成ではありません。穀物価格は下がりますし、生産意欲がなくなります。今もその疑問は残っています。

私が以前にいたバングラデシュの農村と比較すると、バングラの方が圧倒的に人も多く自然も豊かですね。バングラの土地制度は地主小作制でそれが社会のネックになっていますが、エチオピアの場合は末端の行政機関の力が強く、カバレという単位も上から与えられたもので、自発的な組合組織とは違うでしょう。彼らの農地もカバレから借りたものなので、田畑のケアだっていいかげんになるのではないですか。だって木は必要だとわかっていても、植えて育てた木が自分や自分の子供のものになるとは限らないのですから。

女の人はエチオピアでは本当によく働きますね。バングラの女性はイスラムという宗教で一応保護されてる感じがしますが、エチオピアでは女も重要な労働力です。たとえば男が荷をかついでいるのを見たことがありません。いつも女性でした。

最後にJVCの事。JVCのプロジェクトの印象は小じんまりしているなということ。在来の材料で囲った泉は、コンクリートで固め蛇口をつけた24時間テレビのよりいいと思います。それから伊藤さんたちの作っている味噌には感激しました。



エチオピアの少女たちと(右から2人目が筆者)

JVCNEWS

熊沢ゆりさん

バンコクへ

長い間空席が続いたバンコクの広報担当に、ようやくのことで熊沢ゆりさんが決まった。この8月10日に出発する。

熊沢さんはJVCに来るまでは愛知県長久手町の社会福祉協議会の職員をしていた。そこでは老人クラブの温泉旅行の引率などをしていていたが、高校の時から関心を抱いていた“海外の活動”をやってみたく、『中部リサイクルニュース』に載っていたJVCの人材募集に応募したのだという。

タイに行くのは初めてなので、タイの人々と接して、タイの国をもっと知りたい。日本とどこが違うのか見ておきたいし、それにおいしいというタイ料理にも期待していると、熊沢さんは抱負を語るが、バンコクオフィスの仕事は涉外とか、日本からの訪問者の案内などが主な仕事となるので、もしかしたらちょっと期待はずれになるかもしれない。そこでバンコクをよく知るスタッフは、「まず友達を作りなさい。そうしたらイモヅル式にいろんな人と知りあえる。いろんな所にも行ける」とアドバイスする。

最後に御両親のことをお聞きしたら、「あっけないほどあっさりとして認めてくれました」という。そして「そういうところで修業してこい」とも。大柄な“山ゆり”のような熊沢さんが日本女性のイメージを変えるかもしれない。



熊沢ゆりさん

日本縦断チャリティーウォーク 募金額は 270 万円

本誌にも旅行記を載せている長谷川勉君の「日本縦断チャリティーウォーク」には、全国各地から、なかにはブラジルやカナダからも2,757,345 円の募金が寄せられた。そのうちの1,940,005 円は、長谷川君が作ったチャリティーウォークの郵便口座への入金と、長谷川君のお父さんが集められたもの。（なんとお父さんは御自身で100万円をも集められた）

8月1日にはJVCの事務所においてその贈呈式が行われた。歩き終えた時の長谷川君の晴れ晴れとした笑顔は印象的だったが、長谷川君の陰で御自分のネットワークをフルに生かして募金に協力したお父さんにも、いっしょになって1つのことを成しとげた充実感が感じられた。

募金の集計は7月31日で一応締めきられましたが、忘れている方は直接JVCにお送り下さい。

夏だ、ロックだ

熱帯林を守れ

都心とはいえ青山は、土曜日の夜はひっそりと静まりかえってしまふ。その住宅街の一角にあるゲーテセンターで7月30日、ロックコンサートが開かれた。主催したのは「地球の友」のチャールズ・スチュアートさん。コンサートの収益は熱帯林を守るために活動しているグループに送られる。

JVCでは国内活動を行っているメンバーが中心になって機動力を発揮し、チケットから飲食物の販売までフル回転。サントリーからも協力を得てビール24本入を10ケース、オレンジジュース30本入5ケースが寄贈された。

JVCは預ったチケットのうち65枚を売り、飲食物の利益をふくめ17万7010円になった。今回の催しのJVC側のまとめ役になった竹内俊之さんは、「JATANや地球の友の人たちの企画だったが、参加させてもらって楽しかった。JVCも利益を得たし、当日来て下さった人も含め、皆さんに感謝しています」と述べている。



JVCに募金を届ける長谷川君とお父さん

「日本縦断チャリティーウォーク」を終えて

立教大学 長谷川 勉

● 日本の大きさ

「狭い日本、そんなに急いでどこへ行く」という言葉がある。確かに、車や飛行機を使えば日本は狭いだろう。しかし、65日をかけて徒歩で歩いた私の感想は違う。「なんて日本は大きいんだろう。そして、なんていろんな人が生きているんだろう」

自分が住んでいるので、私たちは日本を知っているような気がする。だがとても限定された身の回りの日本しか私たちは知らない。

● なぜ歩こうと思ったのか

日本縦断チャリティーウォークは、5年間の大学生活（1年留年している）の総決算だった。私が大学で見てきたこと、やってきたことの全てが動機になっていたといってもよい。一番大きなきっかけは、昨年の夏に1カ月間JVCの学生ボランティアとして、井戸ポンプ修理プロジェクトに参加したことである。カンボジアの国境に近い10余りの村々を訪れ、村の窮状を肌で知ることができた。

炎天下の中でやっと修理が終わった。私と村人の目があり、ニッコリほほ笑む。水がほとばしり出てくるのを見て、すぐに3人の子供たちが服を脱ぎ始めた。バケツにためた水を奪い合っている。彼らの笑顔を見られただけで、ここに来て良かったと思った。

昨年（1987年）タイは干ばつで、例年の3分の1しか米の収穫がなかったと、帰国後JVCの専従スタッフの方から話を聞いた。約1カ月の滞在で私は多くの友人ができた。その友人たちが干ばつで困っている。技術も知識もないけれど、何かで彼らの自立を助けてあげたい。そこで思いついたのが、学生ならではの時間と体力を使う「日本縦断チャリティーウォーク」だった。

そのほかの潜在的要因としては、私が大学2年の時に、先輩が歩いて日本縦断をし、楽しいエピソードを聞いていたということもある。私の血も騒ぎだした。また、文教大学講師、ジュリアン・バンフォードさんにも刺激を受けた。彼は今年の夏に3回目の「日本縦断チャリティーサイクル」を達成する。日本では、募金イコール街頭募金という固定的なイ

メージしか浮かばない。でもこれからは、彼のようにアイデアと体力を活かしたゲリラ的な募金方法がどんどん生まれてくるだろう。

このほかにも、チャリティーウォークの動機はたくさんある。とてもこの限られた紙面には収まりきれない。しかし、これらが核となって留年覚悟の日本縦断が始まったのである。

● 九州編

九州の中でも、とりわけ熊本県は思い出深い。県内に入った最初の宿は警察署だった。といっても、別に豚箱へ入れられたわけではない。夜の11時頃、私はへとへとになってその町にたどり着いた。どこでもよいからすぐ横になれそうな所はないかと思見回した。すると、前方で赤色灯が回っているのが見えた。私は警察署の扉を開けた。宿直のおまわりさんが二人いた。どこの馬の骨ともわからない私に対する対応は氷のように冷たい。しかし、学生証を見せたり趣旨を説明して、ようやく宿泊の許可を得た。ストーブを囲んで世間話をしていると「寒いだろう、これでも食べなさい」と言って、カップラーメンを食べさせてくれた。その晩はロビーの長イスを2本合わせてその上で寝た。

翌朝8時に起きると、すでに30人のおまわりさんが出勤していた。あわただしく荷物をまとめて、お礼を言って出ていこうとすると、係長さんが手招きをする。「いま、朝定食を頼んだから、それを食べてから行きなさい」と勧めてくれた。朝食を食べて丁寧にお礼を言うと、「最後まで頑張るんだぞ」と送り出してくれた。

また、熊本県の球磨村では過疎に悩む老夫婦の家に泊めてもらった。地元の温泉で偶然出会ったおじいさんの家だ。夜7時を過ぎてお宅に到着した。おじいさんは「疲れたろう」と言ってしきりに酒を勧めてくれた。勧めてくれるのはいいのだが、おばあさんの目を盗んでは、「ちよっと飲ましてくれや」と言って私のグラスを取って飲む。それをおばあさんに見つかって、何度も怒られた。

自分の家だから、もっと堂々と飲めばいいのに、私は不思議に思った。しかし、だんだんわかってき

た。毎日大量の酒をあおるので、おばあさんはおじいさんの健康を心配して怒っているのだ。一方、おじいさんはなぜ自分の酒量を超えてまで飲み続けるのか。それは、一言で言って寂しいからだと思う。山の中なので仕事はなく、2人の息子は家を離れた。そして27戸ある部落の中でも高齢化が進み、若い家族と言え30歳前後の夫婦の家一軒だけである。自分のまわりから次々と人がいなくなっていく。まるで世界の中で自分だけが取り残されていくように。はっきりとおじいさんがそう言ったわけではないが、そんな寂しさを忘れるために酒をあおっているように思えた。

過疎の事は私も知っていた。しかしそれは知識の上であり、肌身に感じたのはこれが初めてだった。

● 本州編

富山県の高岡では、JVC 発足当初からの会員であるというお寺でお世話になった。このお寺の住職さんは、併設の幼稚園の園長さんでもある。せっかく来たのだから、園児に話をして欲しいと頼まれた。「いいですよ」と快く引き受けたものの、言った後で頭を抱えてしまった。相手が大人ならば、私のつまらない話を我慢して聞いてもくれよう。しかし、相手はかわいい園児である。どこまで彼らの生活レベルで話ができるだろうか。そんな私の様子を察して、私が話を始める前に、園長さんがだいぶかみくだいて私のことを説明してくれた。

私が「水がなくなつてのどが渴いたらみんなどうする？」と問うと、「ジュースを飲む！」という返事が返ってきた。「それじゃ、ジュースもなくなつたらどうする？」「牛乳を飲む！」「牛乳もなくなつたらどうする？」と繰り返していくと、やがて100人ほどの園児は黙って考え込んでしまった。だが、しばらくして1人の園児が「ビールを飲む！」と言ったのには笑ってしまった。とても拙い話ではあったが、彼らなりに干ばつ、すなわち、水がないというのはどういう事かを考えてくれたのではないかと勝手に思っている。

● 北海道編

私は感激屋で、美しい風景やいい人（もちろんきれいな女性にも）に出会えた時は、すぐ感動する。その点では、まさに北海道は感動の連続だった。広大な大地、どこまでも広がる牧場、ときおり出会う北キツネ、そして温かい人々。だが一方で、北海道

の寒さには泣かされた。宗谷岬まであと4日という音威子府（おといねづ）まで来て雨と雪とあられ、それに強風が加わった。山の中の国道を耐えて歩いていると、次々と車が止まった。「この先30kmぐらいいは一軒の家もないぞ。乗っていきなさい」乗りたいたのは山々だが、チャリティーウォークのためには歩かねばならない。丁重に断り続けた。

腰から下はびしょ濡れになり、急速に体温が低下した。だんだん顔が青ざめてくるのが自分でもわかる。これは自分の能力を超えていると思った。またこうも考えた。「八甲田山死の行軍というのがあったが、こんな寒さの中を何日も歩けば確かに気が狂うだろう。もしかしたら自分も気が狂って凍死するかもしれない」幸いにして、そうならなかったのが今こうして原稿を書いている。しかし、あの時は本当に『死』というものを身近に感じた。

● タイの人たちのために、そして自分のために

こうして多くの善意と出会い、また困難を乗り越えて、無事に宗谷岬に立つことができた。それもこれもいろいろな形で声援を送ってくれた方々の励ましなしには達成できなかったと思う。チャリティーウォークをやめようと思った時に、いつもこう考えた。「これをやめて喜ぶ人は誰で、悲しむ人は誰なのか」と。喜ぶ人は誰もいない。しいていえば、喜ぶのは苦勞をしたくないという怠惰な自分の心ぐらいだろう。その反対に悲しむ人はたくさんいる。まず、私の趣旨に賛同してくれたスポンサーの方々、大学の友だち。そして何よりも私の募金を心待ちにしている、干ばつにあえぐタイの人たちが悲しむ。自分が頑張りさえすれば、多くの人が笑顔を取り戻せる。そう考えると、「よおーし、やってやるぞ」と力が湧いてきた。

タイの人たちの自立を願って始めた「チャリティーウォーク」。けれども、今考えるとそれはすべて自分のためでもあった。困難を乗り越えた事は自分の自信につながった。全国で出会った人たちとはこれから、何らかの形で懇意にしていきたいと思う。たった65日間で、私は実に多くの宝物を手にしたような気がする。



チャンパー村を訪ねて

ラオスの近くて遠い村

前田 初江



チャンパー村

雨期の晴れ間の7月のある日曜日。私は案内役の友人のバイクに乗せてもらい、チャンパー村を訪問することができた。ヴィエンチャンから北へ15キロほど舗装道路を走り左折、そこから4キロの所がビエンカム村だ。兵舎があるのでここまでは自動車が通る道路が通じている。さらに3キロ行った所にチャンパー村があった。

この3キロが遠かった。橋のない季節、河川が2本あったり、岩の多い坂道があったり、木が倒れて道をふさいでいたり、水が溜って池になっていたりで、歩いては何度もバイクから降りて、歩かなければならなかった。雨量が増えれば足だけが頼りになる。

チャンパー村はなだらかな丘陵の中腹にあり、隣のビエンカム村に通じている道路と山へ入る山道のほかは森に囲まれている。山へ通じる道の入口には動物の出入りを防ぐ竹の扉がある。村の横を流れている川は乾期には涸れるという。村人はこの川で食器、衣服、体を洗うのである。家々には、牛、豚、山羊、羊、鶏、家鴨などの家畜が飼われていて、木や野菜が家畜に食われないように家の回りは竹垣で囲ってある。家屋も穀物小屋も野菜床も高床になっている。家の横には足踏みの米つき機がある。

この村にはラオ族、カー族、タイダム族が住み、隣村にはモン族が多いという。民族毎に家の造りが違うので、家を見れば何族が住んでいるか直ぐわかって友人が教えてくれた。田植えの時期とあって留守がちな家が多かったが、それでも何人かの村人から話を聞くことができた。

チャンパー村は1972年に誕生した新しい村で、41戸、約200人が住むという。村人は全国から集まった人達で構成されており、大部分が農業を営んでいる。彼らは山合いのわずかな空地に水田を作ったり、山を開墾して焼畑を作り陸稲を植えている。伝統的な自然農法であるため収穫量が少なく、加えて田畑が遠く往復に数時間も費やすので労働効率も悪い。

さらに子供たくさんで家族も多いので自給自足も出来ないという。

村には、役場兼駐在所、集会場、診療所、小学校、共同井戸の施設がある。竹で建てられた役場の小屋には南金錠が掛けられてあり、草屋根と柱4本の集会場には山羊たちが集会しており、休暇中の小学校は深閑としていた。

人々のくらし

近寄ってきた村の保健夫の話では、彼は北部ホーイサイの看護学校で1年半学んだ後、ここへ移って来たという。隣のビエンカム村と兼任しており、週2日は隣村へ出掛けるとのことである。村人は、特に子供に肺炎や下痢の症状が多く、裸でいるのが原因ではないかと言っていた。政府からカディダインやアトロピンなど数種の薬が月1回配給されるが、とても足りないと言う。そして、せめて聴診器と血圧測定器がほしいと溜息をもらした。

小学校は教師1人で2学年の生徒を担当している。3年に進級したい者はビエンカム村まで通わなければならないが、そことて4年までしかないという。教師は教材を自己負担しなくてはならないので、勢い授業に対する意欲が薄れるということは否めないことである。

急に、村唯一の雑貨屋がテレビ放送を始めた。少々の日用雑貨とビニール袋入り駄菓子を店先に吊してあるだけの店であるが、村で唯一テレビを持っている。タイの番組である。たちまち店先は人垣でいっぱいになった。

私たちが訪問したどの家庭でも、女性は現金収入を得るために周囲の山から竹を採って来て、それを切り、ひごを作り、お米を蒸す籠を編んでいた。雨期の終りには竹の子採りをして現金収入を得ているという。一日竹籠編みに没頭すると、10個から15個出来るそうで、市場へ持って行くと1個40キップ（1キップ÷0.4円）で売れるという。ヴィエンチャンでの1日の平均労賃が500キップだからまずまずの収

入であるが、女性には、水汲み、洗濯、米つき、炊事と様々な家事があるから、本当のところは、そんなにつくることは出来ないのが現実である。

家庭では各々役割分担が決まっているようで、子供は、弟妹の子守り、家畜の世話、少し大きい子は水汲み、竹ひご作りを手伝う。実際、村で会ったどの子供も弟妹を小わきに抱えていたし、棒を持って家畜を追っていた。友人は、「この子供は遊びを知らない」と言うが、遊ぶことにかけては天才である子供が遊びを知らないはずがない。手伝いに追いまわられて遊ぶ暇がないのである。川での水浴びは唯一子供が遊べる時である。水をかけ合い、潜り、泳ぐ子供たちの表情は明るい。

女性が野良仕事や家事の他、籠を編めば、男性は田畑の開墾のかたわら、狩猟をしたり、草や竹、そして木を切って来て柱や壁、屋根を作る。ある家では、主婦が干した草で屋根敷きを作っており、夫が子守りをしていた。

村を一周して雑貨屋の前に戻ると、既に店は閉じて、人気がない。友人はごく当然とばかりに「畑に行ったんだよ」と言った。2時間も店を開けていただろうか。村の人は皆多忙である。

雑貨屋の女主人の話

雑貨屋の主人の母親を訪問した。屋根は草、柱は木、壁は編んだ竹で造られており、釘以外はすべて周囲の森で調達したものである。草屋根は3、4年、竹壁は5、6年の耐久年数しかないで、農閑期の大事な仕事である。

彼女はシェンクワンに生まれ、戦禍がひどくなったので1964年にヴィエンチャンへ引越して来たという。しかし、町での生活は、物質的な便利さは認めるものの、光熱費、家賃などの他、物を見れば購買欲も湧いてきて出費がかさむようになったり、騒音に耐えられないことなどの理由で、1972年にこの村へ移って来たと言う。「ここにいれば電気代も水道代も要りません。ここでは、土地は耕しただけ自分のものになります。数年前に診療所ができたので村人は本当に喜んでいます。それまでは20キロも離れた町まで行かなければならなかったのです。病人は苦しくても車の通っている町まで歩かなければなりませんでした」

彼女は語り継ぐ、「村の女性は、私の所へ避妊方法を聞きに来ます。彼女たちは避妊方法を知らないのです、次から次へと子供を産んでしまうのです。こ

こでは、子供が8人ぐらいいるのが普通です。女性たちは恥ずかしいので妊娠しても診療所へ行かず、出産も一人で済みますのです。私は、たまたま子供が出来にくい体質だったので、子供は3人だけでした。村の人は私が避妊していると思っているのです。子供くさんの家族は働き手が多い割には収穫が少なく、お米の自給自足ができません。皆んな朝早くから日が沈むまで働いていますが、生活は大変です」

村の抱えた問題

あの婦人は、チャンパー村はいい所だと言った。戦禍を経てきた人々にとっては、あそこは平和な所だろう。しかし、今日の糧のためにせっせと働いている人たちはどう思っているのだろうか。ラオス政府は森の枯渇化防止のため、定住化を促進、来年度から新しい土地での焼畑を禁止した。

チャンパー村は素晴らしい自然環境を備えた所だからこそ、厳しい生活が要求されるのは無理もないことである。この村の抱えている問題は多い。

まず、米の自給自足が出来ていない。焼畑農法、田畑までの距離が遠いなど改善の余地も多い。

水汲み、米つき、炊事、育児などの仕事が少しでも軽減されれば、現金収入がより確実に得られるようになるに違いない。女性にはこのほか避妊や出産、育児の知識も必要だ。計画的な出産は乳児死亡率や羅病率を低下させると共に、母親の体力減退を防ぐことにも通じる。

この他にも2学年しかない子供の教育のこと、トイレの普及、そして農繁期の季節保育所、食生活の改善などがあげられる。

JVCが農村で行おうとしている生活改善活動に関する問題が、このチャンパー村だけでも幾つも見い出せた。生活改善の意義を村人に理解してもらうことから始めなければならない。

ラオスは門戸を開放し始めたと言うものの、首都から20キロも離れた所へ行くには許可が必要である。友人が事前に村長、郡長の許可を取ってくれていたからこそ、雨の晴れ間の急な訪問がなかったのである。あまりのことでぼこ道に、バイクは音をあげ、止まってしまった。手持ちの工具で修理する友人の腕を大きな蚊がちくりと刺した。

木もれ日がちらちらする山道を下りながら、もう一度訪れたいと願った。間もなく始まる生活改善普及活動も試行錯誤を重ねなければならないだろう。

孤児院の子供たちに笑顔はもどったが



カンブチアの 忘れ得ぬ人々

本田 徹

戦いの傷跡

彼らは2・3人の組を作って、プノンペン市内の飲食店や商店をシラミつぶしするように一軒一軒回っていく。一軒の店で一人が手に入れるのは、1リエル（約1円）か2リエルに過ぎないが、何十組という仲間が時間をずらして次々と訪れては「徴集」してゆくのだから、全体の額は決して馬鹿にならない。しかもこれは一日として欠かさず続けられる日課なのだ。

薄暮のころ私が一人で、あるいは熊岡さんたちと食堂でめしを食っていると、彼らは「コツン、コツン」という松葉杖特有の高い音をたてて、入口に姿を現わすのだった。ほとんど無言。暗い、^{ひんやり}傲然とした面持で、店の女性が差し出すものを当り前のように受け取ると、次の店に移っていく。彼らの多くはポル・ポトの軍隊との戦闘で足を吹き飛ばされた。それかたいていは地雷による負傷と聞く。こうした傷痍軍人はプノンペン市内やその周辺だけでも数千人に達するのだろうが、貧しい政府は、彼らに社会保障的なサービスや埋め合わせをすることはもちろん、十分な栄養と礼をもって遇しているとも言えない。

一方で、タイとの密貿易や市内での商店経営で成金を果した人々も少なくない。足をもぎとられた若者たちは、「自分が片端になったのは、こいつらを太らせてやるためだったのか」という、社会全体にまで及ぶ猛烈な^{えんさ}怨嗟の感情をつのらせているわけだ。戦いの傷跡は道路や建物にもあるが、それ以上に深く、この若者たちの心と肉体に刻み込まれている。彼らの社会的・経済的な復権は、一義的には政府の責任においてなされるべきことだが、NGOもまた、

この若者たちのために何をしてあげられるか真剣に考え、取り組まなければと切に思った。少なくとも彼らが、屈託のない表情で食堂に入ってきて、互に席を隣して夕食を取れる日が訪れるまでは、私たちが人間的に負い目なしにあの松葉杖の音を聞き、かつハイネッケンの冷えたビールを傾けることはできないであろう。

夫と子供を失って

プノンペン郡のRINEセンターの責任者であるトゥ・カックさんは今年50歳。カンダール県中に知れ渡った優秀な助産婦だ。最近眼が弱くなったとこぼすことしきりだが、それでも彼女は週の3、4日は病院に泊り込んで赤ちゃんを取り上げている。彼女の夫は1977年ポル・ポトの兵士に「処刑」された。旧体制下で中央郵便局に働く役人であった。夫婦に子供は5人いた。そのうち上の4人はポル・ポト時代に親から切り離され、一種の児童収容所で生活したらしい。当時14歳だった長女は栄養失調のため収容所で死ぬ。トゥ・カックさんは娘の死に目にも会えなかったという。彼女が手許で育てた8歳の末息子も栄養失調で死んだ。

当時のことを、彼女は極力思い出さないようにしているという。本当は、「思い出すな」と自分に絶えず言い聞かせねばならないほど、あの時代の記憶は生々しく、悲しみや怒りや口惜しさが容易に彼女の胸を溢れさせてしまうのだろう。いとしき者たちへの鎮魂と自らの安らぎとを求めるためにも、彼女はRINEの長として、助産婦として仕事に没頭する以外ない。その痛ましさとその気概に私は敬服する。

生まれ変わった男たち

RINEセンターを訪れる母親の多くが、毎年とか一年おきに妊娠を繰り返している。ある日ピンチヒッターで小児科の外来をやってみた。たまたまかもしれないが、男児が女児を受診者数ではるかに上まわった。病院長のサム・サルーンさんにそのことを話すと、彼は微笑みを浮べて、「ポル・ポトの時代に男が沢山死にました。田舎の人々の中には、殺された男たちが赤ん坊になって生まれ変わってくるのだと固く信じている者もいますよ」という。

まさに国全体が「転生」のラッシュなのだ。

生まれ変わった子供たちの未来が少しでも明るくなるように、私たちに精一杯のお手伝いをしたいものです。
(88. 7.28)

書評

『NGOが見た カンプチア』

アフガンのソ連軍撤兵開始、イランの国連停戦受諾に引き続いて、にわかにテンポを速め始めたカンブチアの和平交渉の動きに世界の耳目が集まっている。日々の報道もようやく詳しく、また多くなってきたようだ。

しかし、カンブチアほど、特にここ10年の間国際社会から無視され、見捨てられてきた国はなかった。

『NGOが見たカンブチア』が描き出すのは、復興が成しとげられるまでに「1世代以上の時間」がかかるといわれるほどの深い打撃を受けながら、国際的な開発援助の一切を拒まれ続けたこの国の人々の困難な状況である。そしてこの状況のほんとうの解決のために何ができるか、何をすべきか、というはっきりとした道筋である。

本書はカンブチアにとって、数少ない西側世界への“窓”となってきたNGO 34団体が、その体験を通じて共同でまとめた詳細な記録だが、単なる報告書にとどまることなく、このような苦況のただ中にある小国の人々を、孤立させ放置したままにしてきた国際社会への痛烈な告発の書ともなっている。

したがって本書の最大の特色は、NGO が標榜してきた「人道的」「緊急」援助という、いわば政治的な価値判断を一切控える基本姿勢を、あえて一歩も二歩も踏み出し、外交的・政治的な分析と判断を下していることにある。

本書は、この困難な状況をもたらした原因である、20年に及ぶ戦争と5年にわたるクメール・ルージュの蛮行をふり返ることから始まる。75年から78年の春まで、100万から200万人に及ぶ人々が餓死し、あるいは飢えによる病に斃れ、クメール・ルージュによって殺害された。

79年のベトナム侵攻は、クメール・ルージュによる恐怖の支配からカンブチアの人々を救ったが、同時に彼らは国際社会からの完全な孤立という次の苦難の中に導かれることになった。たとえば、「1975年以前にカンブチアにいた450名の医師のうち、79年にはたった45名だけが残った。この45

エバ・ミシリビエッチ 著
JVC刊 連合出版

岡本 厚

名のうち20名が、その後国を去った」(同書72頁)という、想像するだけで茫然とせざるを得ないような困難な現実を抱えながら、カンブチアの人々は、他の国々によって救援の手をさしのべられるどころか、突き放され、無視されたのである。

蛮行から人々を救ったベトナムは糾弾され、人人を殺害し、国土を破壊した責任者であるクメール・ルージュは国境付近に追いつめられながらも、国際機関の援助を受けて勢力を維持し、それどころか国連に認定され続けるという、まことに奇妙な構図ができあがった。

本書が指摘するのは、この奇妙な構図の“奇しさ”そのものである。

国境付近のキャンプへの援助は、国内へ入って破壊活動を行う反政府ゲリラへの援助になっていると本書ははっきりという。そしてゲリラは、国内の資源を復興より防衛へ振りむけさせることによって、回復を遅らせ国民を疲弊させる。

国内で必死に活動するNGOは、そのNGOが属している政府が国境付近で行う援助によって、自らの努力を水泡に帰せられるというジレンマの中に身を置くということになったのである。

こうした深刻な事態が、NGOに前記のような政治的・外交的判断を下すに至らせたのであろう。簡潔にまとめられた諸国政府・国際社会への「勧告」は次のようにいう。

- ①政治的考慮から切り離れた再建・開発援助の供与
- ②集団殺害行為に責任があるクメール・ルージュへの支援の撤廃
- ③タイ・カンブチア国境地帯の事態の解消
- ④新しい外交的イニシアチブの発揮

あえてここまで踏みこんだ「勧告」は、国際社会にとって重要な意味をもつが、同時にこれを提起したNGO自身にとっても、これ以後の援助に対する姿勢やその役割について大きな変更を迫るものではあるまいか。

JVCにとっても、避けて通れない問題を本書によって投げかけられているといえるのである。

赤熊康代さん



「え、歳、出すんですか？」

はっとした感じで、赤熊さんは可愛い声をあげました。インタビューの初め、いつもどおり、名前、年齢を聞いたあとのことです。

「私、松田聖子と同じで、ゆうてるんです」

緊張して、つい、本当の歳を言ってしまったのです。もちろん、希望どおり、歳なんか書きません。ただ聞いてみただけです。でもこのやりとりで、赤熊さんの性格が少し分かってきました。明るくて、楽観的で、現実的のようでどこか夢を見ているようで……それでいて实际的。JVCでもときどき見かけるタイプなんですよ。

「ひまで、ひまで、しょうがないから、手伝っているんですよ」

という赤熊さん、ミニスカートから伸びたきれいな足もあって、いかにも独身で学生か無職という感じですが、実は結婚しています。ダンナさんが2月から9月まで、タイに長期出張しているので、アパートで一人、第二の独身時代を謳歌しているとか。

「出張やなくて、赴任なら私も行けるんやけど」よく分からないのですが、会社の規定が違うらしいのです。

「私が初めてJVCにかかわったんは、タイの主婦ボランティアとしてです。タイの日本人社会というんは、意地が悪いんですよ。すぐに会社の名前を聞いて、それで人を差別するんです。そんなことをしないのが、唯一、主婦ボランティアの人で……」

バンコクから日本に帰らる人のいらなくなった

ボランティア登場5

衣料や本をバザーにするんや、奨学金を受けている人が日本への手紙を出すの、手伝いの手伝いをしました」

ダンナさんの足掛け3年にわたるバンコク赴任が終わり、帰国したのが昨年。今年また出張で出張してしまったのでひまになったんだそうです。

「JVCに来ると楽しいわ。いじめる人も所帯染みた人もいないし。もっとほかのことをしていたら金儲けできるのに、身を粉にして働いているのにやさしいし……。会社に勤めたら若い人にいびられてしまうわ」

とあくまでも明るいインタビューは続きます。

「私、讃岐（香川県）の生まれやから、もともと妥協的やし、ラクして金儲けしたいタイプなんよ。友だちも讃岐の人が多から、『ものずき』『銭にならんことをする』言われて……。それでも、なんでここに来ているかというと、富安さんが好きやからかしら……。バンコクでもそうやったから」

富安さんというのは、この欄の第1回目に登場した方で、JVCや犬養道子さんのみどり一本運動に対する募金を担当していただいています。彼女の誠実な礼状のおかげでなんども募金をする人が増えたという功労者ですが、こんなところでも……。赤熊さんの仕事は富安さんのお手伝いです。

こういった人間の魅力って、組織を大きくするうえで大切なような気がします。これからJVCを発展させるためには、こういう要素も大切だという話を、先日も誰かとしていました。

「気負わずに、長くやっていけたらいいんと違います？ 難民とか、飢えた人のことなんか学校では習わんし。ここの事務所にきていたら、ずいぶんいろいろ勉強になる……」

と続いたインタビューはミッキーロックとジョンローン、どちらが魅力的かという話で終わりました。（ちなみに彼女は後者の大ファン）。

普通の人が普通感覚で参加できる組織、それはNGOの理想の一つです。赤熊さんと話をしていたこんな人がもっと、もっと増えればJVCは良くなる、強くなると思いました。事実、最初に思い出した赤熊さんに似た人も、彼女が入るとグループ全体が元気になる、そんな人だったように思います。もちろん本人に悩みがあっても、です。（A.G）

JVCプロジェクト

1988年7月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会－毎月第1月曜日 午後6時～9時 毎月第3土曜日 午後1時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 加藤志保, 林 達雄 前川昌代, 鶴田三芳, 古西 勇, 富安光子, 岩崎美佐子, アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC神奈川)	神奈川県内における渉外, 事業計画, 情報収集, 資金調達等を行う。 神奈川県および県内の市民団体との共同事業の企画, 運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション。 実行委員会により準備が進んでいる「'88チャリティーウォークかながわ」は, 寄付金の贈呈先として5つのNGOによるプロジェクトを選んだ。その中にはJVCのラオスにおける母子保健のプロジェクト, SHAREのカンプチアにおけるRINEプロジェクトも選ばれた。10月16日の実施に向けてJVC神奈川も準備に全力で協力している。		山口誠史
日本国内	●定住難民プロジェクト 7月16日, JVC神奈川で学習会及びミーティングを行った。学習会ではカンプチア事業担当の古西が「インドシナの国々の歴史と日本の関係」について主にカンプチアを中心に話をした。定住者の背景を知る意味でも今後もこのような形の学習会を開催していきたい。『もしもしあかね』の第7号が発行された。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金, 「チャリティー・ウォークかながわ」, 日本少林寺拳法連盟	山口誠史, 落合正幸, 谷本栄子, 他約60人
	●東金農場 自給用の野菜を作っている。 東金で産直運動をしている「さかさま農園」や山武ボランティア協会などと, 毎月1回勉強会を行っている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア (ウォロ州)	●緊急食料援助(コレブを中心に) 昨年の大雨期に続き, 今年の小雨期(3～4月)にも雨が不足し, 家畜のエサとなる牧草すら生えて来ない。すでに9カ月間, 人々はJVCから配給される小麦を炒って食べるのみである。今後も人々の生存のために食糧配給を継続する予定である。 ●総合的復興促進(マーシャ) - 植林, 土壌保全 昨年8月に山間部斜面や家の庭に植えた苗木は雨不足にもかかわらず, 75%が枯れずに残り, 70cmぐらいに育っている。 - 母子保健・栄養 家庭菜園, 離乳食等の訪問形式による指導が母親自身の手で行われつつある。 - 給水 清潔な飲料水確保のため, 泉の保護をしている。種子銀行, 農業教室も引き続き行っている。	CRDA, 犬養道子・みどり一本運動, 日本少林寺拳法連盟, モラロジーMIRC, 東京グリーン・ウォーク, 西本願寺, ジャパン・タイムス, チャリティー・サイクル, Tree for lifeの会	鈴木直喜, 山田 盛, 伊藤達男, 伊藤幸子, 有本敦子, イエットベルク, ソロモン, パレタ, フェ テルワルク, ダニエル

活 動 地 名	活 動 内 容	出 資 団 体	担 当 者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	●農業による自立促進 閉鎖していた Unit 1 を再開した。14 人の地元民を入植させ、水路の補修工事に着手した。Unit 3 と Unit 4 の収穫は若干落ち込むことが予想される。地力が低下したためだ。 ハルバ地区では、ルーク地区に比べ全般的に収量が多い。Unit 10 と Unit 11 でも作付けが始まり、農民(難民)たちは難民キャンプを出て農場周辺で仮住まいをしている。 ●植林 ハルバ・キャンプでも初めて苗木を 1,600 本配ったところ、非常に好評であった。 ●現金収入 水屋、かじ屋、パン屋、靴屋、焼物屋を開業中。 ●コミュニティー・サービス AMREF (民間の医療協力機関) が行っている地域医療のトレーニングコースに Unit 7 の農民も参加し始めた。 つい先日ソマリア通貨の対米ドル交換レートが 1 米ドル=99 シリングに下落し、物価全般が大きく上昇し始め、JVC のプロジェクトにも影響し始めた。	UNHCR, 創価学会青年平和会議, 仏国土をつくろう会	金子一弘, モハメッド・アブディ, シアッド, 荻ノ迫善六, 中野周二, モハメッド, ラシッド, アオキ, アブディ・ジョフ, ムハバ, アブドラーヒ, アブディナサル
ジャララクシ・キャンプ (ヒラン郡)	農民(難民)たちが自分たちでお金を出し合い、ブルドーザーなどを独自に借りて農場建設に着手した。このような難民の努力が、援助に依存しきっている他の難民たちに自立心を喚起するのを期待したい。		シュクリ
カンブチア (ブノンペン) (カンダール県)	●サンタピエップ技術学校/ワークショップ 長くかかった倉庫棟の建設もほぼ終了した。門の扉は鉄材を電気溶接で組み立て完成した。現在、敷地内の入口から工場の建物までの整地を計画している。トラックの修理作業は、スベアパーツの到着した 5 月以来、不十分ながら作業量がかなり増えてきた。現在はサスペンションブレーキの足まわりの作業が多い。 ●井戸掘り 農業省水利局の井戸掘チームは、6 月からポーサット県で井戸を掘っており、8 月中旬にブノンペン市に戻ってくるまでに 8 本の井戸を完成する予定である。その後ブノンペン市内とカンダール県ブノンペン郡で計 4 本の井戸を掘り、カンボット県に移る予定である。 ●RINE (ライン) プログラム [母子保健活動] ブノンペン郡のそれぞれの村のプライマリー・ナース (初級看護師) と助産婦に対する研修の 2 回目が、7 月末から 8 月初めにかけて行われる。 ラインセンターの建物は屋根に乘せるまで完成した。9 月 20 日ごろ完全に完成し、10 月 1 日に落成式を行う予定である。	創価学会青年平和会議, モラロジ- MIRC, 立正佼成会, 自動車労連, 西本願寺, 善興寺ダーナ基金, 高岡寺族青年会, 覚法寺, 「チャリティ・ウォークかながわ」, 日本少林寺拳法連盟, 毎日新聞大阪社会事業団, 大竹財団, 東京都社会福祉協議会, 国際ソロプチミスト千代田, 明るい社会づくり運動神奈川県協議会, 浄土宗東京地区青年会, 和平基金, 国際保健協力市民の会 (SHARE)	熊岡路矢, 簗田健一, 簗田玲子, 馬 清, 釘村千夜子 [カウンター・パート] タック・カン, アム・ディエン, メアス・サメット, ゲット・ソーン (保健省) アン・サルン医師 (カンダール県保健局) ニム・ニエム医師

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ バンコク事務所	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報, バザー, 古本のセール。 季刊『ニュース・レター』(英語・タイ語) 発行。	全国社会福祉協議会	ボンピモン・チャイブーン, カモン・ミンムアン, スン ニー・ティチャリヤクン
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 一気筒, 単車, 電気, 自動車, 溶接の技術訓練。 本年度の3期目がスタートした。生徒数 462 人。前期から始った基礎電気コースの人気の高い。 7月15日, タイ合同作戦司令部(JOC)は, カオイダン・キャンプの難民をボーダーのキャンプ(サイト2サウスの南, バン・タット)に移動させることを発表した。バン・タットに移動した後も UNHCR が引き続き管轄する。10月には第1陣の移動が始まるようである。 また, カオイダン・キャンプはクメール難民の移動終了後, 医療機関と各種トレーニングセンターを残し, 自主的本国帰還のための促進センターにするといっているが, その信ぴょう性はさだかではない。なお, 今まで国境のキャンプの保安活動にあっていたタスク・フォース80(TF80)が, 今日から DPPU(Displaced Persons Protection Unit = 避難民保安部)に変わる。	UNHCR, SV(Stichting vluchteling)	ソムヨット・ラタナタム, 清水俊弘, 大石道子
パナニコム (第三国定住待ち カンブチア難民村)	●文化オリエンテーション ●日本定住予定者 ①日本語学習の基礎(読み, 書き, 聞き取り) ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ●日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深めてもらう。	天理教千葉	フォード・順子, 鶴岡善和, 山畑 匡 アナン・ブダミリンパ イーブ
地域開発 (バンコク市内の スラム地区) (ブリラム県の M村)	●奨学金プロジェクト 子供たちのレポートを作成し, 翻訳している。 ●クロントイ図書館 7月3日, CDチームと1, 2, 3地区の人々でタン・ブン(功德をつむこと)を行い, お坊さんの講話を聞いた。 ●農村開発 コメンがM村の学校で農業教室を開いている。 ●7月24-26日, スリラチャ・チョンブリにおいてスラムで働く5つのNGOが研修会を開いた。	モラロジーMIRC, JOFIC, We Love Asia Tree for life の会 雄勝町町内寺院 会 国際ソロブチミ スト駿河	バティット・チャンスリヤ オン, サムルアイ・ジョ ンヨークラン, リーラ・ クンナロン, コメン・ス ンサマラヤ 今泉 恵
ラオス (ビエンチャン)	●生活改善指導員養成センター 婦人を対象に母子保健, 幼児教育, 家政一般, 農業訓練等の一般知識修得並びに実習を保健省, 教育省などの協力を得て行うセンターの運営援助, および技術協力を予定。 センターのは7月15日に着工した。完成予定は1989年1月。 1988年11月にはセンターでの指導要項を作製するため, ヴィエンチャンに隣接する3県の農村で実情調査を行った。	木幡律子チャリ ティコンサート 庭野平和財団	谷山博史, 前田初江

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することが出来ます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援 (金額は自由です。)

▶機関誌「Trial & Error」のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC 東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (7月小計 35,140円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (7月小計 294,372円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救援募金 (7月小計 3,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンブチア募金 (7月小計 568,500円) カンブチア国内の復興のために使われます。
- E. タイ・スラム募金 (7月小計 15,000円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. スラムの子供奨学金・基金 (7月小計 110,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. タイ農村募金 (7月小計 0円) タイの農村開発のために使われます。
- H. 定住難民募金 (7月小計 5,000円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. JVC運営経費募金 (7月小計 5,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. ラオス募金 (7月小計 1,229,858円) ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。
- K. 無指定募金 (7月小計 390,566円)

編集後記

▶「離婚された女のことを何ていうの?」「寡婦でもやめでもないし、もちろん未亡人とはいわないし……」「うーん、そういう日本語ってあるかな」

実はエチオピアの婦人のためのプログラムについての会話である。エチオピアの農村の少女たちは、初潮前に親の決めた人に嫁がされ、朝から晩まで働いたあげく、容貌が衰えたたとんに三下り半。彼女たちには自分の財産なんてないから食べていくには手に職をつけるしかない。かごを編んだり刺繍をしたり。それにしてもそんな身勝手な男たちのたいていは、すでに後添を見つけているなんて、ちょっとひどい話じゃないですか。



▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)

加入者名—JVC 東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497

(7月小計 763,762円)

犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けることになりました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

昭和63年8月20日発行 (毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎ 03(834)2388 FAX: 03(835)0519

Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易セ

ンタービル9F (財)神奈川国際交流協

会内 ☎ 045(671)7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。